
白蛇の庭

通天閣ひぐま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白蛇の庭

【Nコード】

N1622E

【作者名】

通天閣ひぐま

【あらすじ】

白蛇の庭・・・それは、士郎の家の庭の事だ。なぜか、昔からかもしれないが家の庭は、「白蛇の庭」（はくじゃのにわ）と呼ばれていた。ある日、一人の美女が転校生として、士郎のクラスに転入してきた。その美女は、士郎の事を知っていた。そして、士郎が大切にしていたお守りを美女に焼かれてしまう。

第1話：白蛇の夢

士郎は、またあの夢を見ていた。最近、変わる事の無い同じ夢を何度となく見るようになって居た。

ザク、ザク、ザク

士郎は、お爺ちゃん子だった。何時もお爺ちゃんの後をついてまわっていた。

士郎が8歳の誕生日の日にお爺ちゃんは、家の庭で白蛇を捕まえてきた。

「どうするの？ その白蛇・・・」

士郎は、無邪気に興味津々でお爺ちゃんに尋ねたのだ。

「うむ・・・この白蛇なあ。何度も家の外へ放りなげても、遠い所へ捨てに行ってもなあ。直ぐに白蛇の庭に戻ってくるんじゃない」

「へえ・・・それって、不思議だよね」

士郎は、困った顔をして言うお爺ちゃんの前で目を輝かせてそう言った。

白蛇の庭・・・それは、士郎の家の庭の事だ。なぜか、昔からかもしれないが家の庭は、「白蛇の庭」（はくじやのにわ）と呼ばれていた。お爺ちゃんは、「うん」と頷いたかと思うと白蛇を腰に提げてた手袋に詰め込んだ。そして、白蛇の庭の外へと歩きだす。

「お爺ちゃん？ どこ行くの？」

「ああ、ちよつと田んぼになあ。捨ててくる」

お爺ちゃんは、そうたどたどしく言つと再び士郎に背を向けて歩き出した。そんなお爺ちゃんの後をトコトコと士郎は、ついて行つた。

ザク、ザク、ザク

士郎は、それを震えながら眺めていた。お爺ちゃんは、まるで鬼気迫る形相であの白蛇を田んぼの真ん中で殺して居たのだ。両手に持つたクワで何度も何度も叩き潰すように何度も。

ザク、ザク、ザク

「クソ、クソ、クソ、何故だ、何故だ、何故だ」

そのかすれて消えてしまいそうなお爺ちゃんの声が士郎の耳元に残つて離れなかつた。そして、その三日後にお爺ちゃんは、心臓発作であつけなく死んでしまったのである。

第2話：再会

「士郎！！おい、士郎！！！」

誰か身体を揺さぶるのを感じて士郎は、薄っすらと目を開けた。

「うつ・・・うん？」

「おいおい。寝すぎだな。もう昼休み入ってんぜ！」

そんな親友の声に士郎は、ブルブルと顔を振った。

どうやら、午前中の授業を全て居眠りしてたらしい。と、そう思い出した様に士郎は、教室の中を見渡した。机で寝てたおかげで、身体の節々が痛いとし郎の身体が訴えてくる。

そんな士郎の姿を親友、岸田護が訝しげに見た。

「わかってるよ。寝すぎだって！ 昼飯食いに行こうぜ」

士郎は、ゆっくりと席から立つとポンと護の右肩に手を置いた。

「おう、早く行かないとA定食が無くなる！」

護のその言葉を最後に士郎たちは、教室を出て食堂へ向かった。

そうだ、俺は、17歳で・・・ここは、学校だ。士郎は、その事を確認するように心中で呟いてた。そう、あの夢が余りにもリアルだったので、今の自分が現実なんだとし郎は、確認したかったのだ。

「なあ、士郎！」

「ん？」

護が食堂に向かう途中で士郎に話しかけてきた。

「お前、午前中寝てたから知らないと思うから、言っけどさ」

「……」

「午後から転校生が来るらしいぜ！　それも女！」

護は、嬉しそうに「美人だと良いな」と呟いていた。

「ちっ、午前半休かよ！　たいそうな御身分だよな」

士郎がつまらなそうにそう言つと護は、パンつと活きよいよく背を叩いた。

「俺たち、ピチピチの高校生だよ。そんな末期サラリーマンみたいな台詞やめようぜ！」

「ピチピチ？　脂ぎってるの間違いだな」

「あはは、相変わらず士郎は、キツイねえ〜！」

護は、その言葉が可笑しかったらしく、大げさに笑ってみせた。

「おおつ、すげえ」

午後授業が始まる前に転校生の紹介があった。それで、教室の中が騒がしく、しばらく落ち着く気配がなかった。それは、転校生としてやって来たのは、女性でそれも見たことのない程の美女だったからだ。長い黒髪は、腰まであつて、和風美人といったところ。着物がとても似合いそうな感じだった。そんな美人が転校生としてやってきたものだから、男子生徒は、落ち着かず次々にその転校生に無謀とも言える質問を繰り返していた。クラスの女生徒達もそんな転校生に興味があるらしく、男子生徒と同じぐらい騒いでいた。

ドクン

士郎の心臓がひととき大きく脈打った。士郎もその転校生を見てから、心臓の脈打ちが早くなっていた。

ドクン・ドクン

「おい、士郎！ あの転校生の名前・・・朝比奈薫だつてさ」

士郎の後ろの席から、護は呆けた顔を転校生に向けて言った。

「くっ・・・やばい・・・な」

士郎は、とっさに心を落ち着けようとした。さっきから、士郎の心臓は、破裂するような勢いで脈打っていた。これは、いつもの発作の前触れに似ている。士郎は、生まれつき心臓が弱かった。士郎の心臓は、未だに小学生ぐらいの子供の大きさしかない。心臓だけ成長に取り残された感じである。

身体が成長するにしたがつて、小さな士郎の心臓は、必要な分の血

液を身体に送る事が負担になってきたらしい。時々、心臓の発作が起きるのだ。興奮した時など特によく発作を起こす。士郎は、ゆっくりと席から立ち上がった。それを見た担任の教師が

「辰巳！ どうした？ 顔色悪いぞ！ また、いつもの発作か？」

つと言った。

士郎は、声をだす気力もなくて頷くだけだった。

「くっ・・・拙いな・・・目も見えなくなってきたやがった」

士郎は、そんな事を心なかで呟きながら何とか机にしがみ付いた。

「先生、私が彼を保健室に連れていきます。先生は、授業を行っていてください！」

「あつ、いいのか？ 保健室の場所わかるのか？」

「ええ、任せてください！」

そんな聞きなれない女性の声。誰かがトコトコと士郎の横へ近づいてきた。そして、士郎の腕を掴んで士郎の身体を無理やり立たせた。士郎の腕が誰かの背に回されて、よたよたと歩きだす。その人物に方向を先導されて、士郎は、無理やり歩かせられた。教室を後にして、廊下に出た所でその人物は、話かけてきた。

「ねえ、大丈夫？」

「・・・」

やはり、聞きなれない女生徒の声だった。士郎の腕を掴む彼女の手は、冷たく体温が感じられない。それは、・・・まるで、爬虫類のような体温だった。

第3話：記憶

士郎の身体は、一人の女生徒の手によって、優しく保健室のベッドに寝かされた。

「さあ、早くこれを飲んで！」

唐突に彼女は、そう言って何か薬のような物を士郎の手に握らせた。

「・・・なんだ・・・これは？」

士郎の目は、さっきから目が見えない状態で、どんな薬なのか確認のしようがなかった。

士郎は、不安になって尋ねてみる。

「いいから、早く！」

そう言って急かす彼女と胸の苦しさに、これ以上耐えられそうになかった士郎は、我慢できずにその薬を口の中に放り込んだ。

「クツ・・・」

士郎は、強く喉を鳴らして一気に飲み込んだ。

するとどうだろうか、まるで今までの胸の痛みが嘘のように消えていった。

目の感覚もしだいに取り戻し、視野が開けていく感覚に驚き士郎は、声を上げた。

「嘘だろ……」

あまりにも奇怪な自分の身体の現象に驚いながらも士郎は、取り戻した視力でをこの保健室まで運んできた女生徒の顔を見る。

「朝比奈……」

「薫よ」

士郎が彼女の名前を言い終わるまえに朝比奈は、静かにそう言った。士郎をここまで運んできたのは、あの美人転校生の朝比奈薫だったのである。

「あー……ありがとう……」

士郎がそう言うと朝比奈は、ニツコリと微笑んだ。

そして、士郎は、不覚にも顔を赤くしてしまったのだ。

「あ、いやその……さっきの薬は、何？ あんなに効いたのは、初めてだ」

士郎は、沈黙に耐えきれずにそんな事を口走っていた。

「あれは、何処にも売ってないわ。だって、私の家伝わる秘薬だもの」

朝比奈は、そんな事を悪気もなさそうに言つてのけた。

士郎は、何かえたいの知れない薬を飲んでしまったようだと言つた。薄気味悪く思えた。

家に伝わる薬なんて総じて、えたいの知れないものばかりだ。有名な物では、ムカデをアルコール漬けにした塗り薬とかいったもの。

「ねえ、少しお話しない？」

朝比奈は、そう言つたと士郎が横になっているベットの隣に椅子を持つてきてチヨコンつと腰を下ろした。

「話つて・・・」

士郎は、話をしななかつて言われても会つたばかりの朝比奈とどんな話をすれば良いのかわからなかつた。

そんな事で悩んでいるを楽しむように眺めていた朝比奈だったがふとのはだけたシャツの間から見えるお守り袋を凝視していた。

「・・・・朝比奈？ このお守りに興味あるのか？」

士郎は、お守り袋を手を取つて見せた。

「ええ、とつても」

そう言つた朝比奈は、今までと変わつて真剣な表情をしていた。

「そのお守り・・・少し貸してもらえないかな？」

朝比奈は、とても興味がある様子でそう言つた。

このお守りは、士郎にとって大切な物だった。このお守りのおかげで士郎は、今まで生きてこれたようなものだ。

士郎は、お守りを朝比奈に渡すつもりは無かった。あまり他人の手には、渡したくなかったのだ。

「これは、駄目だ。渡せない」

士郎がそう言うのと朝比奈は、少し残念そうな顔をした。

「そう、でも良いわ。それより、士郎・・・あなた私の事覚えてない？ 幼い頃、よく一緒に遊んだのよ」

朝比奈は、少し笑みを浮かべてそんな事を言った。

そんな馬鹿なはずはない。朝比奈は、俺の事を知っているのか。と、士郎は、信じられない気持ちと驚きの目で朝比奈薫の顔を凝視した。

幼い頃の記憶なんて、もう曖昧でその時に遊んだ子供が朝比奈だった可能性もなくはない。

だが士郎は、朝比奈の事を思い出せないでいた。

「ごめん・・・思い出せない・・・」

士郎がそう言うのと朝比奈は、また残念そうに表情を曇らせた。

「まだ時間がたっぷりあるわ。ゆっくりと私の事を思い出させてあげる」

そう言った朝比奈の姿は、妖艶での心臓は、またドクンと高鳴った。そして、朝比奈は、スツと椅子から立ち上がるとに背を向けて保健室から出て行こうした。

「・・・朝比奈？」

士郎は、思わず朝比奈に声をかけていた。朝比奈は、ゆっくりと振り返って士郎の顔を見据える。

「今日は、ここでユックリして居てね」

と言って朝比奈は、保健室を後にした。結局、士郎は、午後の授業を全て休んでしまっていた。

朝比奈の薬のお蔭で苦しみは、無くなったもののやはり士郎の身体は、言う事をきいてくれなかった。

士郎は、放課後になってようやく動くようになった重い身体を鞭打って家に帰る事になったのだ。

第4話：お守り、炎上

士郎は、自分の家に着くと玄関にある見慣れない靴に目を止めた。

女性の靴。誰か客でも来てるようだと士郎は、そう感じた。

「ただいま」

そう言つて靴を脱ぐと部屋の奥からパタパタと軽快な足音をならして、士郎の目の前に一人の少女がやってきた。

「おかえり〜、元気してたか？ 士郎！！」

そして、そんなそんな馴れ馴れしい少女の声が飛び込んできた。

ショートで髪型でボウイツシュな感じの女の子。士郎と同じ歳の従妹、双葉である。

「なんだ？ 遊びに来てたのか？」

「んー、ちよつと気になる事があつてね」

双葉は、士郎の質問をはぐらかすようにそう言った。

「それより、士郎？ 帰りに蛇でも掴んだ？」

双葉は、いきなり話の见えない質問を士郎に浴びせた。

「蛇？　なんで？」

「士郎、蛇臭いよ！　何があつたかわからないけど、お風呂入ってきなよ」

双葉は、真剣にそう言つてそんなに蛇臭いのか露骨に嫌そうな顔をした。士郎は、腕を鼻に近づけて自分の匂いを嗅いでみる。

「うゝん、そんな蛇臭い匂いなんてしないけどな」

「それは．．．士郎が鈍感だからだよ！！！」

双葉は、ビシッと士郎を指差して自信たつぷりに言いきつた。

「あのなあ．．．」

士郎は、力なくそう言った。自分では、納得できなかったが結局帰つてきて直ぐにお風呂に入る事になったのだ。

士郎が身体を洗つてユツクリと湯船に浸かっていると脱衣場の方に人の気配を感じた。

「誰？」

「士郎、私．．．」

士郎の問いかけに双葉の声が聞こえて来た。

「士郎、あのお守り大切にしてる？」

「ああ、双葉のお守りのお蔭で何時も助かってる」

そう、あのお守り袋は、双葉が士郎にくれた物だ。

あのお守りは、妖怪や妖魔をしりどける力があつて、得に士郎のよ
うな妖怪や妖に襲われやすい体質を持った人間には、大切な物だ。

「今日はね、もっと強力なお守りを持ってきたの。妖怪なんて、士
郎の身体に指一本触れられないんだから」

双葉は、少し興奮している様子でそう言った。

「・・・いや、今までのでも十分だよ。双葉」

「そんな・・・十分だなんて二度と言わないで！！ 十分だなん
て無いよ・・・士郎は、危険なんだから・・・」

そう言った双葉の声は、消えてしまいそうなほど弱々しかった。

「そうか・・・じゃあありがたく頂いておくよ」

士郎がそう言うのと双葉は、安心した様子で「うん」と言った。

士郎の血筋は、特殊なのだと父から聞いた事がある。なんでも妖怪
や妖にとって辰巳の血は、上質で他の人の血と比べられない程のも
のだと言う。

だから、妖怪や妖は、辰巳家の血を隙あれば奪おうと狙っているの

だと土郎の父は、言っていた。そんな事・・・迷惑な話だとまるで他人事に土郎は、そう思っていた。

次の日、土郎はまた授業中に倒れてしまった。気がつけば、保健室のベットのの上に横になっていたのだ。

「あれ・・・また・・・」

土郎は、まだぼんやりする頭でそんな事を呟いた。意識を失うと言う事は、こんなもんなだと改めて、土郎は、そう思う。

突然、プツリと記憶が画面が途切れてしまうのだ。

「やっと・・・気がついたのね？」

「えっ!？」

直ぐ隣から聞こえる声に驚いて、土郎は上半身だけを素早く起こした。

よく目を凝らしてみれば、薄暗い保健室のなかでランランと瞳を輝かせた朝比奈薫が存在してた。

土郎のベットの直ぐ隣でチョココンと椅子に腰掛けて土郎の顔を見ていた。そして、ニッコリと笑顔を浮かべて見せる。

「あっ・・・そうか、また朝比奈が？」

「違うわ。今日は、土郎の友達が・・・私は、様子を見に来たの」

士郎の問いかけに朝比奈は、少し残念そうに言った。護が運んでくれたのだろうか。と、士郎は、そんな気がした。

「もう、放課後よ」

「ああ、そうだな・・・」

士郎は、腕時計の時間を見る。時計の針は、午後5時過ぎをさしていた。

「やばいな・・・早く帰らないと・・・」

「まだ、良いんじゃない？ ゆっくりして行くといいよ」

朝比奈は、少し押しが強い口調でそういった。

「ああ、でも・・・」

「ねえ、昨日の話の続き・・・」

士郎が返答する前に朝比奈は、そう切り出した。ちょっと、強引だなっと思っただ、朝比奈の意向に従う事にした。

「昨日の話って、あれか・・・俺と幼い頃遊んだ事があるってやつ？」

「そう、いっぱい遊んだのよ」

朝比奈は、とても嬉しそうにニッコリと笑った。

「まだ、思い出さない？」

「ああ・・・」

やはり何度考えたても朝比奈と遊んだ記憶が士郎には、なかった。

でも、どうして朝比奈は、そんな事にこだわるのだろうか。と、ふと士郎は、疑問に思った。

「そっか・・・じゃあこの話は、これでお終い」

朝比奈は、士郎の返事に残念そうにしていたが直ぐに気を取り直した様子で士郎の目の前に右手を差し出した。

「今日もお願いするわ。士郎のお守り・・・私に貸してくれない？」

そう言った朝比奈は、表情を崩さない真剣な瞳を士郎にむけた。

「どうして・・・士郎のお守りに拘るんだ？」

「どうしても、気になるのよ！ そのお守り・・・」

士郎も真剣な表情を向けたが朝比奈は、表情を崩さなかった。

「わかった・・・でも、大切なお守りなんだ。少し、貸すだけだから」

士郎は、首からお守り袋の紐を外すと朝比奈薫の右手にポンっと置

く。

ボツ・・・

突然そんな音がした。士郎は、信じられなかった。目の前で突然、士郎のお守り袋が炎を上げて燃え出したのだ。あつと言つまに炭になつて消えてしまった。

「フフツ・・・消えちゃった・・・」

まるで童女のように朝比奈は、そう言った。

「なっ・・・なんで・・・」

冗談じゃない。と、士郎は、心の中で叫んでいた。あれは、士郎にとって、大切なお守りだった。

何かの手品ではないのかと士郎は、そう思った。

「朝比奈！ あれは、俺の大切な物なんだ。手品かなんかだよな？」
「冗談は、やめてくれ！！」

士郎がそう言うのと朝比奈は、クスリと笑った。

「もう、消えて無くなっちゃった。もう、元には戻らない」

朝比奈は、とても嬉しそうにそう言つてのけた。

「何言つてんだ？ おまえ・・・」

「もう、あんな物・・必要ないのよ！　代わりに私が貴方を守ってあげる！」

朝比奈は、そう言って士郎のシャツの中に手を入れて士郎の胸を撫でる。

突然の事に士郎は、混乱してた。

「え？」

と、士郎が声を上げる前に士郎の唇は、彼女に唇よって塞がれていた。それは、キスと言うには、あまりにも乱暴でまるで士郎の口の中を彼女の舌が犯してるような感じだった。何か自分の魂が彼女に吸われていくような感じを士郎は、感じていた。頭の芯がぼうつとしてきて、士郎の思考が鈍ってきた。朝比奈は、ようやく士郎の唇を開放すると

「あは・・やはり、とても美味しい・・・」

と、恍惚の表情で言った。

そして、ペロリつと自分の唇を舐める。士郎の意識は、この時を境に無くなっていった。また、夢を見る。士郎は、あの夢を・・・。

第5話：古い家

古い昔の家。大きな平屋で、古い歴史が感じられる大きな家だった。

その十畳は、あるだろう広い部屋の中心で土郎と土郎の母親は、その身を寄せ合っていた。

この夢は、土郎が8年前の出来事だと理解するには、さほど時間がかからなかった。

もう夜の更けた真夜中で時計の針は、丁度2時を刺していた。この部屋の3方は、襖に区切られていて襖を開ければ別の部屋に繋がっている。一方の白い障子を隔てた向こう側は、白蛇の庭である。

「しろうつ・・・今日も来たよ。遊びに行こう・・・」

唐突に白い障子の向こう側から少女のような声が聞こえてきた。土郎の母親は、ギュっと身を硬くして土郎の身体を強く掴んだ。

「母さん？」

「行つては、駄目よ。このまま母さんと一緒に居ましょ」

母は、そう言つて土郎の身体をいつそう強く抱きしめた。

「でも、友達が来たんだ。遊びに行かないと」

土郎がそう言つと母は、悲しそうな顔で顔を左右に振るだけだった。

「ねえ、しろうつ・・・私この家に入れないから。しろうつが出て来てくれないと、一緒に遊べないよ」

白い障子の向こう側からまたあの少女の声が聞こえてきた。

ガタン

つと長屋が揺れた。白い障子が少し開き外の様子が見えそうだった。

士郎は、目を凝らして、その隙間から漏れる外の様子に意識を集中した。

その白蛇の庭に立つ一人の可愛い少女の姿を士郎の目は、捉えていた。

あの時の少女は、朝比奈薫にそっくりだった。あの少女は、朝比奈薫かもしれないと士郎は、そう思った。

ザクツとした感覚。

ジャキツとした感触。

士郎の周りには、大人たちが大勢倒れていた。赤い血を垂れ流しながら、30人以上の大人たちが死んでいたのだ。満月の明かりが竹藪の中に居る士郎の顔を照らしつけていた。

「だめだ・・・ためだ・・・あの子は、僕の友達なんだ・・・」

誰もその声を聞く者など居ないのに士郎は、そんな事を呟いていた。

ふとベツトリとした感触が気になって、士郎は、自分の両手を顔の前に持ち上げた。竹藪の暗い中で月明かりごしに見えた士郎の両手は、真っ赤に……。血の色にそまっていた。

「うわあああああああああ……!!!!!!」

士郎は、叫んだ。ありったけの声を絞り出して叫んだ。怖くて、恐ろしくて叫ぶしかなかった。

誰かが助けに来てくれる事を願って……。。

第6話：失くしたモノ

士郎は、大切な物を失くしてしまった。だが、何を無くしてしまったのか思い出せないでいた。

それは、まるで心にポツカリと大きな穴が開いてしまった様な喪失感だった。

「でも・・・いったい何を失くしてしまったのだろう」

思い出せない・・・。

何故？

さつきからそんな問いかけを自分の中でずっと続けていた。思い出せないのは、気持ち悪い。

だけど・・・。

士郎は、ふっとため息を吐いて、辺りを見渡してみた。

「あれ？」

士郎は、少し戸惑った。

考え事をして歩いているうちに駅前の商店街まで来ていたのだ。いつの間にか商店街のアーケードの中心を歩いていた。

今日は、どうしたのだろう。

今日は、何が遭った？

今日は、学校で……午前中は、寝ていた。

午後は、……また心臓の発作が起きた。

そう言えば、朝比奈薫が保健室に居た。

その後は、……どうした？

記憶が無い。

「あつ……チョットいいかな？」

つとそんな声がアーケードを抜けようとした士郎を呼び止めた。

士郎を呼び止めたのは、二十歳ぐらいの青年だった。

「うつ！」

士郎は、驚いた。

それもそうだ。

その青年は、この世の者と思えぬほどの美青年だったからだ。いつ
たい、何処の雑誌から抜け出てきたのかと思うほどだった。服の
センスも良いし、ファッションモデルでもやっているのでは、
ないかと思うほどだった。

「君に訊ねたい事があるんだ」

美青年は、そう言つて土郎の顔を見据えた。なんだろうつて。最初は、土郎も軽い気持ちでそう思っていた。

「あつ、いいですよ」

土郎がそう言つと美青年は、少し困つたような顔をした。

「いや、そうじゃなくてね。ここじゃなんだからさ・・・」

美青年は、そう言つて顔をクイッと商店街の裏路地の方へ向けた。なんだか、土郎は、ヤバイ雰囲気を感じた。裏路地なんて、二人で話をする所では、かなり危険地帯だと言つていい。心臓の持病持ちの土郎には、どう足掻いても逃げ切れる自信がなかった。裏路地まで来ると美青年は、土郎から少し離れた所で口を開いた。

「君は、気がついてないのかな？」

「は？」

イキナリで予想しなかった問いかけに土郎は、そんな間の抜けた声を上げた。

「いや、まずは・・・自己紹介からだよな。僕の名前は、犬上一人・・・ひとりと書いてかずとつて読むんだ」

「はあ、土郎は辰巳・・・土郎」

なんだかわけが解らないまま自己紹介をしたところで犬上一人は、馴れ馴れしく土郎の名前を呼んだ。

「士郎！ 君は、妖魔に憑かれてるね？」

「はあああ？」

またまた犬上一人のとんでもない問いかけに士郎は、思わずそんな声を出した。

「身に覚えは、ないのかい？ これほど強力な妖気が君の身体に染み着いていると言っのに？」

「妖気って？ 解らないな・・・どうしてそんな事を言うんだ？」

誰だってそんな事を言われたら、驚くし言った人物を妖しいって思うはずだ。

と、士郎は、顔を険しくする。しかし、士郎にとって妖魔や妖気って言うのは、幼い頃から身近に感じていた。なのでそんなに驚くようなものでもなかった。なんでも士郎の家系は、妖魔に襲われやすいのだ言っのだから。

第7話：行方不明

士郎が家に戻ると玄関先で士郎の母親が少し取乱した様子で待っていた。

「母さん？ どうしたんだ？」

「士郎・・・よく聞いて！」

母は、士郎が玄関から上がった所で士郎の両肩を強く掴んだ。

「何が・・・あつた？」

「兄さんが、家族全員・・・死んだらしいの・・・信じられないけど・・・今・・・連絡があつた・・・」

「えっ？・・・そんな・・・」

士郎は、一瞬母が言つた事が理解で出来ずにいた。

母の兄が死んだ。

母の兄・・・それは、士郎の親戚である余狩家の事・・・つまり双葉の家族の事である。

双葉の家族が全員死んだ。

どうして、いきなりそんな事が。

と、士郎は、信じられなかった。

気丈な母は、士郎に涙を見せなかったがきつと・・・自分以上に悲しいに違いない。と、士郎はそう思った。

双葉の家族が死んだのは、火事が原因らしい。

家族全員が火災から逃げ遅れたと言うのが消防署と警察の見解だった。

ただ・・・双葉の焼死体だけは、見つからなかった。

行方不明とされていいるが・・・おそらく火事で逃げ遅れたのでないかと、誰もがそう思っていた。

「士郎・・・葬式は、この家から出す事になると思うわ。与狩家の血族は、辰巳家に嫁いだ私しか居ないから」

「ああ、そうだな。俺も手伝う。一人で葬式の準備なんて疲れるだろう？」

士郎は、そう言ったが母は、悲しそうに俯くだけだった。
結局、士郎は準備や通夜と葬式とで三日も学校を休んだ。
通夜も葬式もあっけなかった。

終わってしまえば・・・何も残らない。

その時に悲しんでも、その時の感情でしかない。

何故、双葉と双葉の家族は死ななければならなかったのだろうか。

死亡原因が火災だったとしても、その原因が不明確のままだった。

ただ、士郎が気がかりなのは、双葉の遺体が焼け落ちた家からは、何処にも見当たらなかった事だ。無事なら、直ぐにでも連絡が取れるはずなのに

行方不明である事が・・・士郎の心を更に重くしていた。

第8話：涙

4日後の朝。

士郎は、久しぶりの学校へ行く通学の途中で意外な人物に出会った。

「やあ、士郎！ 久しぶりだね」

その人物は、馴れ馴れしく士郎にそう言った。

「犬上一人・・・」

「少し話があるんだ・・・時間あるかい？」

「これから学校なんだ」

「いや、直ぐ済むよ。ほんの少しでいいんだ」

犬上一人は、すまなそうに言うつついて来いとばかりに歩きだした。犬上一人に連れてこられたのは、通学路の途中にある竹藪の中だった。

二人で話しをするには、あまりにも不釣合いな所である。

「フツ・・・いい感じだよ。士郎！あれほど強力だった妖気が今は凄く薄れている・・・」

「・・・」

士郎は、またその話なんだと思った。

妖気が薄れてる。

それは、そうである。

士郎は、葬式とかで学校に行かなかった。

士郎に係わる人物の中に犬上が言う妖が居ると言うなら、おそらく学校で出会う人物しか居ないとそう士郎は、思っていた。身内の人間で妖が存在する事じたい考えたくない事だと士郎は、思考を切り替えた。

学校に行かなかった。

妖気が薄れていると言う事は、やはり学校にその妖魔が居ると言う事なのだろうか。と、士郎は、考える。

「それで・・・話って？」

「フム・・・話っていうのは、士郎の妖気が薄れているか確かめたかっただけだね」

「なんで・・・」

「もう、士郎は、気がついているのだろうか？」

「なにを・・・」

「僕が・・・妖だって事を・・・さあ！」

「・・・・・・・・」

犬上一人は、ニィ〜と笑みを浮かべて土郎を値踏みするように見ていた。

「土郎！ 凄く良い状態だ！ これなら、白蛇の妖気に邪魔される事なく、君を頂ける！」

犬上は、そう叫んで土郎の方へとゆつくりと近づいてくる。やはりそうなのか。と、土郎は、後ろに一步下がった。土郎の予想は、たぶん正しいだろう。妖魔である犬上は、土郎の血を欲しがっている。土郎は、犬上が一步前に進む度にまた、一步後ろへ下がった。だが、それも途中まで。

ついに土郎の背に太い竹の幹がコツンと当たった。

「クツ・・・」

犬上は、既に土郎の目前まで迫っていた。犬上一人の両手がスツと伸びて土郎の頭を掴む。

「そうだ。大人しくしている」

身動き取れない土郎に犬上一人は、そう優しく言った。犬上は、土郎の目の前に身を寄せてきた。土郎の身体と犬上の身体が密着したかたと思うと、犬上は、イキナリ土郎の口を自分の口で塞いだ。

「うつ・・・」

士郎は、声にならない声を上げようとした。だが塞がれた士郎の口からは、どんな声も出てくる事がなかった。

気持ちが悪い。

たとえ妖であろうと、男にキスされるなんて、気持ちが悪い。

吐き気がする。

士郎の頭は、犬上の両手でガッチリと掴まれて身動きが取れない。

なんて力だ。と、士郎は、思った。さつきから、動く両手、両足を総増員して犬上の身体を殴りつつづけているがビクともしなかった。

そして、やっと開放される士郎の口。

「クツ・・・何を・・・俺は、そんな気は、無い！ オカマ野郎！」

士郎は、やっと犬上の両手から開放されて、自由になった身体を跳ね上げて右の拳を犬上のコメカミあたりに打ち込んだ。

ゴッソ

つと言う鈍い音がした。だが、そんな士郎の渾身の攻撃が効いた様子も無く犬上は、ニヤリと笑う。

「何言ってるんだ？ 人間は、妖の餌だろう？ 餌の性別なんて気

にする奴なんているのか？　クククッ・・・」

犬上は、可笑しそうに士郎の目の前で笑って見せる。

「良事を教えてやろう。さっきのは、味見だよ。人の精気は、何が一番強いと思う？　そう、血だよ。そして、2番目に人が吐く息だ」

犬上は、そう言ってペロリと舌で唇を舐める。

「何が・・・そんなに・・・」

つと士郎が言いかけた時、士郎達の間割り込むように女性の叫び声が聞こえた。

「士郎から離れなさい！！！！　犬神イイ！！！！」

それは、聞いた事のある声だった。この声がした方を犬上が向くと素早く士郎の側から離れた。すると、今まで犬上が立って居た場所を槍のような竹の棒が射抜いた。

ズバッ

つと風を切る音。

「おつと・・・怖い怖い・・・白蛇の娘か・・・」

気がつけば犬上一人の姿は無く、ただそんな声が竹藪の中に響いた。

そして、土郎の横には何時の間にか朝比奈薫が立っていた。

「土郎？ 大丈夫？」

土郎を気遣うように声をかける朝比奈。

「何で、朝比奈が・・・」

土郎は、そう言い終わる前に身体のバランスを崩して倒れそうになる。

それを朝比奈は、しっかりと支えてくれた。だが、朝比奈は、気を緩める事なく辺りを必要に警戒していた。

「犬神！！ 土郎に手を出さないで！！」

何処に居るのか解らない犬上一人に向かって朝比奈は、叫んだ。

「おやおや、数百年に一度の奇跡を独り占めするつもりなのかい？」

何処からともなく聞こえる犬上の声。

「・・・・・・・・」

「何を恐れている？ 欲しいんだろ？ 土郎の血が。喰らい付き、むさぼりたのだろう？ 土郎の肉を。我慢する事は、ないんだ！何を躊躇う？ それにそのご馳走は、一人では食べきれないだろう？ 白蛇の娘！ 君の食べ残しても良いんだ・・・。この僕に分けてくれよ！」

「士郎は、そんなんじゃない!!」

朝比奈は、耳を塞ぎ、頭を左右に振りながら必死になってそう叫んでいた。

「ふん、まあいいさ。今日のところは、大人しく引き下がるよ。でもさ、本能に逆らうのは、辛いよね？　辛いだろ？　クククツ・・・」

そんな犬上の声が最後に竹藪の中は、しゅんと静まりかえって沈黙が支配を始めようとしていた。そしてその沈黙を破ったのは、士郎の声だった。

「朝比奈？」

「・・・・・・・・」

朝比奈は、士郎の顔を見ようとしめない。

そのまま士郎に背を向けて立去ろうとする。

「朝比奈!!　待てよ!!」

士郎は、必死になって立去ろうとする朝比奈の右腕を掴んだ。そして、ゆっくりと朝比奈は、士郎の方へ向き直った。

「朝比奈・・・・・・・・泣いて・・・・・・・・いるのか・・・」

朝比奈は、泣いていた。顔をグシャグシャして泣いていた。

どうして。何故泣いているのだろう。この時の朝比奈の涙が・・・
士郎にとって、とても懐かしく思えた。

第9話：呪い

ああ、何て事だろうか。朝比奈薫の泣き顔は、俺の中にある古い記憶を呼び覚ますようだ。

俺の中へ・・・昔の記憶が流れ込んでくる。

どうして、忘れていたのだろう。

俺の中に僕の記憶が飛び込んできた。

それは、とても悲しい記憶だった。

今から8年ぐらい前の出来事だ。

俺が・・・僕が・・・8歳になったばかりの頃。

「うわああああん。うわああああああん」

泣いていた。

小さな少女は、竹藪の真ん中で蹲り泣いていた。激しいリズム。何かをぶちまける様に、全てを曝け出す様に。少女の嗚咽は、竹藪の中に響き渡っていた。

「うわああああん。うわああああああん」

「・・・なかないで・・・」

士郎は、嗚咽を繰り返す少女を強く抱きしめて耳元で囁いた。

「だって・・・だって・・・悲しいよぉ・・・悲しい。大好きだった母が死んでしまったんだよ・・・悲しくて・・・たまらない」

「だいじょうぶ・・・僕が居るから。僕と一緒に居てあげるから」

士郎は、一層強く少女を抱きしめた。それでも少女は、泣き止む様子すら見せずに泣き続けた。その喪失感と親の温もりを失った事への不安がより一層、少女の心を締め付けていた。

もう会えない。

もう話ができない。

もう怒られる事もない。

触れ合う事も、ただ無償の愛を与えられる事も。もう二度と無いのだと言う思いが・・・少女の心を麻痺させていた。士郎は、こんなカワイソウな少女に何をして上げれるのだろうと考えた。この愛しい士郎だけの少女に早く元気になってほしかった。少女の悲しみは、父を失ったばかりの士郎には解る。かけがえのない肉親を失った喪失感は、とても辛いのだ。

「しろっちゃん・・・お願い・・・しばらく、このまま・・・強く抱きしめて居て」

少女は、ようやく落ち着きを取り戻したのか。士郎に抱きしめられたまま・・・静かに目を閉じた。

白い・・・。白い肌の大人の女性が士郎を舐めるように見ていた。

艶やかで美しい大人の女性。

成熟した色気が漂うとても美しい女性だった。神社の鳥居の前でその女性は、そつと士郎も胸に触れた。

「いいかい？　これは、呪いだ！　・・・決して逃れる事のできない呪いだよ」

「の・・・ろい？」

「ああ・・・お前は、あの時、私の娘を選んだんだ。お前は、もうあの子のモノになったんだよ・・・。これは、もう逃れる事の出来ない運命さ」

女性は、そう言って士郎の胸を撫で回した。何か気分が悪くなってくる。何かが士郎の胸の中へ潜り込んでくるような感じがした。

「うつ・・・」

「これで・・・契約は、成立。その呪は、私の娘を裏切らなければ発動しない！　あの子を泣かせる様な事があつたら、許さないよ！」

その女性は、もう一度念を押すように言うとニコリと笑顔を向けた。

「それじゃ、これで・・・」

「ああ、きつとお前を・・・心配して待っているだろうよ。早くいつてやりなよ」

「うん・・・」

士郎がそう頷いて、神社の境内の方へ歩きだそうとした。
ところが、その歩みは、突然現れた人間の男達によって停止させる
しかなかった。

「ちつ、意外と・・・早かったようだね」

女性は、苦虫を噛み潰したように顔を歪めた。士郎達の前に現れた
人間の男達。どいつも、こいつも良い体格でいかにも戦闘に馴れて
いるようだった。そんな男達が30人程、士郎達の周りを取り囲み
始めた。手には、各々得物を持って・・・直ぐにでも飛び掛つてき
そうな勢いだ。

男達は、一言も口を開かずに目だけで合図を交わしあっていた。

「ふん！ 陰気な奴らだ」

女性は、男達を眺めると見下すようにそう言ってのけた。

それは、まさしく一方的な殺戮だった。

人間の大人達は、女性の一振りで次々と倒れて逝った。強さの次元
が違うと士郎は、そう思ってたただ果然とその殺戮を眺めていた。
そんな士郎の姿にどうを煮やしてか

「さあ！ 今のうちに行ってしまいな」

女性は、そう言って士郎の背中を押した。
士郎は、走り出す。

振り返る事も許されずに士郎は、走り続けた。

後ろから聞こえてくる人間の大人達の悲鳴も無視して士郎は、走り続けた。

進むべき道は、理解していた。

士郎は、道なりに走りつづけ、先にある竹藪の中へ身を進ませた。この竹藪を抜ければ、あの少女が待つ神社の境内へ行く事ができる。士郎は、この時、焦っていたのだと思う。

周りの異様な雰囲気にもまるで気がつかなかった。

ぬるりとした感覚に足を滑らせて倒れてしまうまでは。

最初は、何だろうと思った。

このぬるりとしたものが士郎の足を滑らせたのだ直ぐに理解する事は、できた。

日の光りがあまり届かない薄暗い竹藪の中では、それが何であるか直ぐには、解らなかった。

手に付いたぬるりとしたものを士郎は、じつくりと目を凝らして眺めてみる。

「赤い・・・血？」

それは、士郎の良く知っているものだった。

それは、人の赤い血液そのものだった。

それは、生命力の源だった。

士郎は、ゆっくりと竹藪の中を見渡した。

そして、ようやく今自分がどんな場所に存在しているかを知ったのだ。

血、肉、血、肉、血・・・血。

士郎の周りには、そんな得体の知れない空間が広がっていた。

「ああ、ここはまだ危険だよ。この辺りには、人間達がうようよ居るからね」

突然、そんな声が士郎に耳に聞こえてきた。

「だっ誰なの？」

士郎がそう問うと一人の青年が闇から浮かび上がる様に現れた。

「やあ、大丈夫かい？ こんな所に居ると人間に殺されてしまうよ」

青年は、やけに楽しそうな表情を浮かべて士郎にそう言った。

「あなたが・・・殺したの？」

士郎は、周りの死体の山を指さして聞いてみた。

「そうだ。君に危害を加えようとしていたからね」

青年は、ニヤリと笑みを浮かべて、士郎の喉元に右手を添えた。

「僕も殺すの？」

「いや・・・君は、まだ青いな。果実は、熟した方が美味しいだろう？ だから、まだ殺しは、しない」

青年は、そう言って士郎の喉元から手を離すと背を向けて何処かへ消えてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1622e/>

白蛇の庭

2010年10月28日08時34分発行